

元女子校式 マネージャー確保術

～女子水泳部編～



目次

【男子生徒と元女子校】	3
【男子生徒と女子水泳部】	7

※試し読み体験版です

【男子生徒と元女子校】

しりつあいおいじょしこうこう

『私立愛生女子高校は今年度から男女共学化した』

というのは建前で、実際に今年入学した男子は転入も含めて片手で数えられるほどしかいないというのが現実だ。原因は『女子校』という名称を外さなかったことが影響していると思われるが、共学化以前は校長を含めた教師陣、もちろん生徒も全員が女性であったため、設備やルール等が女性用に作られていることも起因していた。

そのせいか、はたまた女性の多さに圧倒されているのか、入学した男性達は非常に肩身が狭い思いをしており、早くも女子と男子の力関係が構築されつつあった。とは言えイジメのようなことが発生しているというわけではなく、男子生徒達が女子生徒達の無言の圧力に屈服しているだけのこと。

原因が分かっているにもかかわらず解決策が無いというのは実にたちが悪いものだ。

「え、ええと……こ、更衣室……更衣室は……」

さがわひなた

『佐川日向』も肩身の狭い思いをしている男子の一人で、クラス人数30名の1年1組において唯一の男子だ。

当人は愛生女子高校への入学を考えてはいなかったが、母親と二人の姉の出身校であり、母親からの強い希望で男女共学化のタイミングで入学することとなった。シングルマザーで苦労しながら育ててくれた母親の頼み、気弱な性格と断る罪悪感が並走して日向を包囲し、姉達の最後の後押しが影響して現在にまで至る。

幸いなことにクラスでは唯一の男性だからといってハブられるようなことはなく、良くも悪くもマスコットのような扱いになっているが、当人は肩身の狭さに四苦八苦していた。

「あ、ああ……ここだここだ」

敷地含め校内が広すぎるためか、日向は未だ校内の間取りを把握できておらず、男性用の設備が無いために益々混乱している日々。運動着への着替えが必要な場合は保健室で着替えるか、迅速に着替えるという条件の元『女子更衣室2』の使用が許可されている。ほとんど保健室で着替えていた日向にとって、保健室のドアノブに吊るされていた『体調不良の生徒が寝ています』という札には絶望を感じざるを得なかったが、選択肢は他に無いため必死に『女子更衣室2』に向かっていた。

そしてようやく更衣室を見つけた頃には時間の猶予もあまりなかったため、ササッと入室して着替えを始める。

はずだった。

「へ……?」

「お、おい……ずいぶん堂々とした覗きじゃんか」

「ちょ、ちょっと、着替え中なんだけど!!」

血の気が引くというのはこんな感覚を言うのだろう。

心の辞書に深く刻み込まれた感覚が日向の全身を包み、事の重大性を告げる音が徐々に脳に到達していく。

二人の女子はスクール水着の肩紐を二の腕から肩に引っ張って肩紐の位置を調整している最中で、丁度女性特有の2つの膨らみが見えないタイミングだったのだが、着替えの最中ということもあり脱いだ後の下着がいまだ露になっている状態だった。いわばギリギリアウト、と言ったところだろう。

膠着した雰囲気の中ようやく状況を理解したのか、日向が慌てふためきながらも二人の女子と下着を直視しないよう後ろを向いて釈明を始めた。

「す、すすすすすす、すみません!!じょ、女子更衣室2ってここじゃないんですか!？」

「ここは女子更衣室1だっの!」

「女子更衣室2は反対だよ!」

「ご、ごめんなさい!!!間違えました!!」

「あ、おい、逃げるなこらー!」

僕の主張はただ一つ。わざと着替えの最中に入ったというわけではないということだ。

しかし、不可抗力とは言え女子の着替え、それも水着に着替えるというシチュエーション、かつ下着そのものが目に入ってしまったことは事実であるため、非難されるということは甘んじて受け入れるつもりだ。

それがあんなことに繋がることになるとは.....

【男子生徒と女子水泳部】

「えーっと、日向……ね」

「……は、はい」

「被告人日向は女子更衣室を覗いたことを認めるか？」

「ち、違います、わざとじゃないんです!」

「ふむ、反省の色無し……」

「ちょ、ちょっと待ってください、は、反省はしてますよ!」

所変わって僕が今いるのは『女子水泳部』の部室。

先程の2名の女子だけでなく、おそらく女子水泳部の部員と思われるスクール水着姿の女子複数人に囲まれ、被告人席に座らせられて『覗きの罪』について尋問されているところだ。この流れから察するに判決は多数決、陪審員制なのであれば勝ち筋が潰えていることは間違いない。

そもそも弁護人がいない時点で不公平ではあるが、この学校の現在の在り方を考慮すれば、その場で処刑されなかつただけ運が良かったとも言える。そんな負け戦の戦場のど真ん中に放り込まれた僕を取り囲む女子の中に、一人だけ圧倒的なオーラを纏っている人物がいた。それは『女子水泳部』の『部長』だった。

「部長、どうしますか？」

「……本来なら先生に報告することだけど」

「え、見逃すんですか？」

「そんなわけないでしょ、取引をしようと思っただけ」

「取引？」

「ほら、皆今困ってることあるでしょ？」

むらたあゆみ

部長である『村田歩美』がそう言うと、『なるほど』と言わんばかりに部員達が「ああ～」と声を揃えながら僕に視線を向けるのであった。

愛生女子高校の女子水泳部は非常に優秀で、全国大会にも名を連ねる校内で一、二を争うほどの一流部活動だ。そのため部員数も多く、規模的にもトップクラスであると言える。だが、顧問の教師は放任主義らしく、必要最低限以外は生徒に任せきりで、良くも悪くも生徒次第の部活動とも言える。

その方針のおかげで優秀な部活動に昇華できたのかは不明だが、優秀と言えどやはり部員だけでは何かと不都合が起きることも多いようで、フラストレーションが溜まりつつある部員が存在することも事実。

「今年から『マネージャー』を取るのもいいかもね」

「ま、マネージャー……?」

「日向くん、キミまだ部活入ってないよね?」

「は、はい……色々と見学させてもらおうと思って……動きやすい運動着に着替えようとしたら……更衣室を間違えました」

「なら話は早いね、ウチでマネージャーやってよ」

「ぼ、僕がですか!？」

相手は女子水泳部部長、かつ上級生。

3年生という圧力の凄みが僕のシナシナなメンタルを完全に掌握しているのは自覚していた。また、村田先輩が提示してきた条件が僕の返答の選択肢を一つに絞らせ、完全に支配権を手に入れようとするムーブになっていた。

「マネージャーやってくれたら先生への報告は一旦保留にするように私から当事者の子達に話してあげる」

「で、でも……その二人は僕がマネージャーになるのは嫌なんじゃ……」

「私から口添えすればある程度は大目に見てくれると思うよ、もちろんちゃんとマネージャー業務やることが条件だけど」

「きよ、拒否したら……」

「女子水泳部総出で日向くんを先生に突き出します」

「ひいいっ……」

よほどマネージャーが必要なのか、それとも村田先輩の人望が厚すぎるのか、被害者とされる女子部員の二人は村田先輩の言葉に『うんうん』と深く頷いているのが遠目でも分かった。

ほぼ僕の命運は決まったと言っても過言ではないが、さすがは一流部活動の部長、脅しのように捉えられてもおかしくない一連の流れを『日向のメリット』に変換して解説する。

「それに『着るもの』とか身の回りのものは女子水泳部で用意するから準備とかいらないし楽だよ」

「……は、はぁ」

「というか今回の騒動で出くわしたのが他の部活だったら有無を言わせずに告げ口されてたよ？ウチは許してあげるところか部員として受け入れてあげちゃうほど優しいってこと」

「……はい」

「マネージャーやってくれるよね？」

「……………はい」

女子水泳部圧勝

日向完全敗北

対戦ありがとうございました

まるで周りの重力が何倍にもなったかのように気が重い、隣を歩く村田先輩の涼しい表情を見て僕の気のせいだということが分かった。

女性と二人で廊下を歩くだなんて今まで経験したこともなかったが、今から職員室に向かって顧問に水泳部への入部の意思を報告するという状況下が気分の浮き沈みをプラマイゼロにしている。この道はいわば地獄のデスロード。今後の長い人生のほんの僅かな時間にしか影響しない出来事だが、短い学校生活に大きく影響する出来事とも言える。

「失礼しまーす、柏木先生いらっしゃいますか〜」

「し、失礼します……」

「ん、村田か、どうした？」

かしわぎつばさ

水泳部顧問の『柏木翼』先生は日本史を担当している先生で、学生時代に水泳をやっていたことから顧問を引き受けたらしい。だが、水泳部の放任具合を見てわかる通り、かなり面倒くさがりのようで結構適当なところが多い。デスクはごちゃごちゃしており、なんとなくいつも眠そうな表情をしている。

しかし、授業に関してはやるべきことはやり、分からない所があれば分かるまで解説を続け、水泳部の部員から相談があれば親身になって話に乗る一面もあるため、生徒からの人気度は高いと言えるだろう。

「マネージャーゲットしました～」

「ん?新入部員じゃなくてマネージャーか?」

「マネージャーやってもらって話になりました」

「そうか、男子か...」

「男子はダメですか?」

「いや、他の部員が構わないなら大丈夫だ.....が、知っての通りウチの学校は『マネージャー専任』っていう枠は無いから他の部員と同じく『一般の部員』として入部してもらった上でマネージャーの役割を与えることになる」

どうやら現部員も僕も同じ扱いらしく、マネージャーだからといってマネージャー業のみをやればいいというわけじゃなさそうだ。

しかし、現部員達との約束は『マネージャーになる』ということであり、柏木先生もマネージャー専門の部員がいたほうが楽になるため、僕の『水泳部の部員』としての活動は最低限で良しとされた。

「そうだなあ.....佐川の主な活動はマネージャー業務で、サブの活動は水泳部の部員として今より少しでもいいから水泳が上手くなること.....だな」

「は、はい」

「了解でーす、水泳の練習に関しては私達で面倒みます」

「うむ、それなら問題無いな.....だが、佐川はいいのか?」

「.....は、はい、僕はプレーヤーよりマネージャーくらいの方が」

「『話し合って決めた』ので問題無いですよ～」

「いや、そういうことではなく.....」

柏木先生は僕がマネージャーに専念しないといけないことに関して心配してくれていたわけではなく、他に僕に関わることで気になる点があったようだ。しかし、僕は柏木先生が意味深な表情をしてまで何を心配しているのか分からなかった。その答えはすぐに提示されるが、ある意味精神をえぐる残酷な内容だった。

「水泳部の正式名称は『女子水泳部』だ、女子校時代に出来た部活動だからわざわざ『女子』なんて付けなくて良かったんだが、昔の顧問がなんとなくで付けてしまったそうでな」

「.....」

「『女子水泳部』の『一般の部員』となると、まるで佐川が女子部員だと言ってるみたいだが.....その辺は気にしないのか?」

「!」

その事実気付いた途端、弱々しい意義を申し立てようとしたのだが、それを封じるかのように村田先輩が僕の肩を抱き『大丈夫です!』と言い放ってしまった

「女子部員でも男子部員でも変わらないでしょ～」

無邪気な笑顔である意味凶悪な言葉を発した村田先輩。それは貴女がこの学校で力を持っている『女性』だから言えるのですよ。と、口にできなかった『力を持たざる男子』であった。

「まあ、なんだ.....言わなくて良かったことだったな」

「そ、そうですよ.....変な不安を植え付けしないでください」

「お前が気にしなければいいことだ、よし、頑張ってこい!」

「.....」

この後の問答が面倒になったのか、柏木先生は急に投げやりな態度で僕をあしらった。

まあ正直なところここで言い合いをしてもなにが変わるわけでもないし、下手に抵抗するような態度を見せればこの場ですぐに『例の件』を告げ口されてしまうかもしれない。今一番懸命なのは大人しく現実を受け入れることだ。

正式に報告が完了すると、ようやく村田先輩もとい『女子水泳部』から解放され自由の身になった。結果的にもたらされた結末を考えると『自由の身』ではないのだが、束の間の休息を得ることができたのだから余計なことは言わないでおこう。

学生生活で一番濃密かつ長い放課後だった。きっと一生忘れることのない時間だろう。

あえて一つ良い事があったとすれば部活の選択で悩む必要が無かったことくらいだろう。部活動が強制でなければこんなことにもならなかったのだけど.....

さがわ ひなた
佐川 日向

年齢：15歳

性別：男性

所属：愛生女子高校

部活：女子水泳部

役職：マネージャー

元女子校である「私立愛生女子高校」に入学した男の子。
ひょんなことから女子水泳部への入部を迫られ、女子の水着の着用が必須である事を知って絶望する事になる。

残念な事に女子のスクール水着から逃れることは出来ず、男子でありながら女子水泳部への入部が確定してしまった。

家に帰っても厄介な双子の姉に着替えを管理されており、自宅でも学校生活でも女子用のスクール水着を着用させられている。

